
[成果情報名] イチゴ‘あまおう’の早期作型における安定生産のための基肥量

[要約] イチゴ‘あまおう’の早期作型では、基肥窒素量をとよのか専用肥料で8kg/10a、あまおう専用肥料で12kg/10a程度施用すると、第1次腋果房の花芽分化がスムーズに誘導でき1~2月の収穫の谷が改善され、総収量が高くなる。

[キーワード] イチゴ、あまおう、基肥、早期作型、第1次腋果房

[担当部署] 筑後分場・野菜チーム

[連絡先] 0944-32-1029

[対象作物] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

福岡県オリジナルイチゴ品種‘あまおう’の早期作型では、第1次腋果房の花芽分化の遅れやばらつきにより生じる収穫の谷をなくすことが課題となっている。

そこで、早期作型において第1次腋果房の花芽分化をスムーズに誘導し、収穫の谷間のない高位安定生産のための最適基肥量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. ‘あまおう’の早期作型では、とよのか専用肥料で基肥窒素を8kg/10a施用すると、16kg/10a施用に比べ年内収量がやや低下するが、第1次腋果房は頂果房出蕾後5枚程度出葉して連続的に出蕾するため1~2月の収量が有意に高く収穫の谷が改善され、総収量は同等となる(表1、図1)。
2. あまおう専用肥料で基肥窒素8kgまたは12kg/10a施用すると、とよのか専用肥料の基肥窒素8kg/10aと比べ頂果房の収穫開始および年内収量、頂果房と第1次腋果房間の出葉数、第1次腋果房の収穫開始および1~2月の収量に差がなく、12kg/10aの施用で総収量が高くなる(表2、図1)。
3. なお、あまおう専用肥料は有機態窒素が55%の配合肥料で、とよのか専用肥料に比べ初期の急激な窒素の溶出を抑え、4月まで安定した窒素溶出特性を示す(図2)。

[成果の活用面・留意点]

1. ‘あまおう’の早期作型における基肥施用量の指標として活用できる。
2. 窒素成分は、とよのか専用が(有機)菜種粕、魚粕、KH有機、動物質、(無機)LPコート(有機態窒素54%)、あまおう専用が(有機)FTE入り混合有機820、(無機)LPコートS120(有機態窒素55%)である。
3. 本試験の基肥施用前のECは0.2dS/m程度であった。また、追肥は、マルチ被覆直前に10a当たり窒素成分でとよのか専用肥料を4kg、スーパーロング140タイプを5kg施用した。

[具体的データ]

表1 とよのか専用肥料による基肥量の違いと果房毎の出蕾、収穫状況

基肥 窒素量	頂果房頂果		内葉数 (枚)	第1次腋果房頂果	
	出蕾日	収穫日		出蕾日	収穫日
8kg	10月14日	11月25日	4.9b	11月27日	2月6日
12kg	10月14日	11月22日	5.4b	12月4日	2月12日
16kg	10月11日	11月21日	8.7a	12月22日	3月4日

注) 1.夜冷短日処理栽培、2002年9月5日定植。
 2.出蕾日および収穫日は、平均日。
 3.内葉数は、頂果房と第1次腋果房間の出葉数。
 4.異なる英文字間には5%水準で有意差があることを示す。

表2 あまおう専用肥料による基肥量の違いと果房毎の出蕾、収穫状況

肥料の 種類	基肥 窒素量	頂果房頂果		内葉数 (枚)	第1次腋果房頂果	
		出蕾日	収穫日		出蕾日	収穫日
あまおう専用	8kg	10月9日	11月15日	5.7	12月1日	2月11日
	12kg	10月10日	11月16日	5.6	12月2日	2月12日
とよのか専用	8kg	10月9日	11月14日	5.8	12月2日	2月17日

注) 1.夏期低温暗黒処理栽培、2003年9月16日定植。
 2.出蕾日および収穫日は、平均日。
 3.内葉数は、頂果房と第1次腋果房間の出葉数。

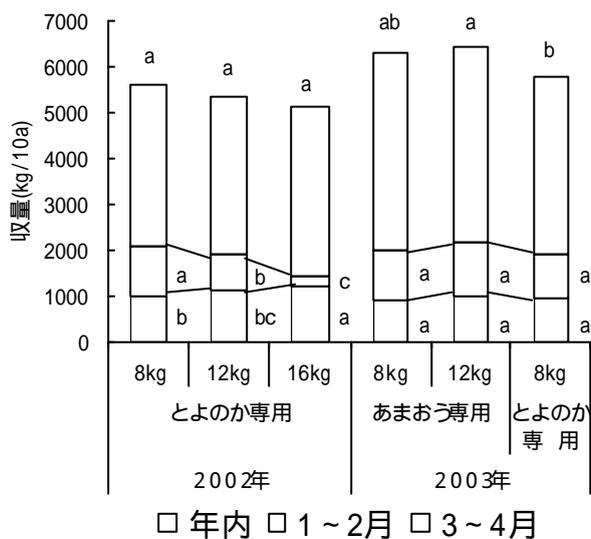


図1 肥料の種類および施用量と収量の関係

注) 1.横軸は基肥窒素量。
 2.同一年度内の異なる英文字間には5%水準で有意差があることを示す (FisherのPLSD法)。

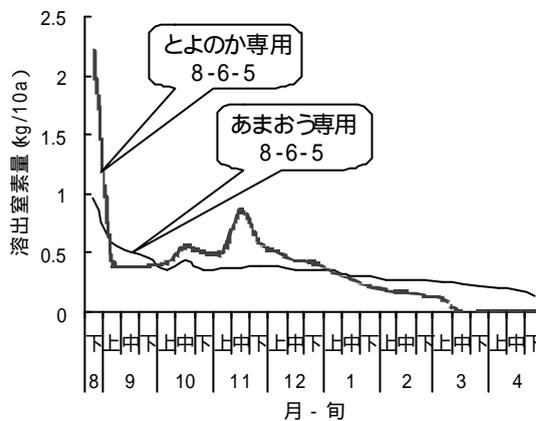


図2 供試肥料の窒素溶出シミュレーション

注) 8/20に窒素成分で12kg/10a施肥したときの溶出シミュレーション。

[その他]

研究課題名：筑後地域における「あまおう」の安定生産技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成16年度 (平成15~16年)

研究担当者：水上宏二、小田原孝治、兼子 明